



TITLE:

『名語記』の研究( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

小林, 雄一

---

CITATION:

小林, 雄一. 『名語記』の研究. 京都大学, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20116>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	小林 雄一
論文題目	『名語記』の研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、鎌倉時代成立の語源辞書『名語記』について、先行書との関係を論じ、その編纂態度について考察したものである。</p> <p>第一章と第二章は本論文の導入に相当する。第一章は先行研究を概観した上でその問題点を指摘する。第二章は名語記の成立から現代に至るまでの伝来についてまとめる。第三章以降は、第三章と第四章が、名語記の漢字表記について、色葉字類抄との関係を考察し、第五章では名語記と和歌に関わる記述について考察する。また、本論文末に第五章の付表として、名語記と和歌が関係する記述の一覧を付した。</p> <p>第一章「『名語記』研究のための序章」は、名語記の成立、構成、解説方法などの基本的な情報について述べた上で、先行研究を概観し、問題点を指摘したものである。先行研究については、著者、構成、音韻・表記、語彙に分けて概観し、名語記を辞書史・文化史の中に位置付けようとする研究が少ないことを確認した。</p> <p>名語記の研究には二つの問題があり、一つはテキストの制限である。翻刻は出版されているものの、影印が刊行されていない。そのため、翻刻が原本の姿をどの程度忠実に再現しているのか分からない。そのことを考慮に入れずに研究に利用したものも見受けられる。もう一つの問題は、辞書研究の基礎となる典拠研究がほとんどないことである。名語記には、直接的な書物の引用が少ないために、名語記の記述が何らかの書物を踏まえる可能性が看過されてきた。しかし、名語記には書名を挙げずに何らかの書を用いたと見られる箇所が散見する。それらを見逃して名語記の記述を利用することは、その記述を正しく理解したことにはならないだろう。</p> <p>そのような先行研究の状況を概観した上で、本論文（第三章～第五章）の執筆意図についても述べた。</p> <p>第二章「『名語記』の伝来について」は、鎌倉時代から現代に至るまでの名語記の伝来についてまとめたものである。</p> <p>名語記は著者自筆本が唯一の伝本である。近代に入ってその存在が学界に紹介されてより、名語記は、所蔵者が二転、三転するなかで研究に利用されてきた。その利用は、所蔵者と研究者の意図が複雑にからむものであり、研究者同士の衝突も生んできた。そのような中、近年、宮津市前尾記念文庫に名語記の紙焼き写真本が所蔵されていることが報告された。論者は、紙焼き写真本を研究に利用する上で、過去の経緯をまとめる必要があると</p>			

考え、文字資料として残る書籍、記事、論文を元に名語記の利用を振り返った。

また、それに付随して鎌倉時代から近代までの名語記の伝来についても、特に金沢文庫から身延山へ名語記が移された時期について、先行研究では指摘されていない資料も含めて論じた。

第三章「『名語記』と『色葉字類抄』」は、名語記の漢字表記の出所について論ずる。名語記は問答体で掲出語を解説する。その際、「問、（掲出語）如何」という問いに対して、「答、（掲出語）ハ（漢字）也」と答えた後に仮名反の解説が続く条が散見する。これらは主として掲出語に対する漢字表記を示したものと考えられるが、その表記には著者の記憶によって書かれたとは考えにくい、一般的に用いられなかったと見られる漢字表記がある。

そのような特殊な漢字表記は、例えば倭名類聚抄に見出すことができる。しかし、名語記は、倭名類聚抄にはない動詞などの語に対しても漢字表記を示している。もちろん、そのような語に対応する漢字は、例えば新撰字鏡や類聚名義抄といった辞書にも見出すことができるのだが、名語記には同じ訓の漢字を複数列举した条があり、それらの漢字は別々の部首に属しているのである。

このような、特殊な漢字表記と、同じ和訓の漢字を列举するという特徴を備えた辞書として、色葉字類抄がある。色葉字類抄は、和語から漢字表記を引くことのできる辞書である。名語記が掲出語に対して漢字表記を挙げる条は多く、もし、新撰字鏡や類聚名義抄のような部首引きの漢和辞書から同じ訓の漢字を探し出したとすれば、相当な労力となる。同じ訓の漢字を列举する色葉字類抄を参照したと考える方がよいだろう。加えて、先に述べた倭名類聚抄は、その大半が色葉字類抄に取り込まれており、名語記の漢字表記の中には、倭名類聚抄に見られず、色葉字類抄にしかないものがある。以上のことから、名語記の漢字表記は色葉字類抄を参照したと考えられる。

このことは、名語記の執筆態度を考える上で、また、色葉字類抄の享受を考える上で、重要な現象であろう。

第四章「『名語記』と『色葉字類抄』続考」は、前章での考察を踏まえて、名語記の漢字表記と色葉字類抄とがどの程度合致するのかを確認したものである。まず、名語記が掲出語に対して示す漢字表記として、「問、（掲出語）如何。答、（掲出語）ハ（漢字）也」というパターンの他に、「問、（漢字）ヲ（掲出語）トヨム、如何」というパターンがある。これらの掲出語と漢字表記のペアは、名語記全体 5970 条のうち 3545 条（約 59%）に見られる。

これらを色葉字類抄と対照させた結果、漢字表記のある 3545 条のうち 2746 条（約 77%）が『字類抄』に合致することが分かった。このことから、名語記の漢字表記はおおむね色葉字類抄を参照したものと考えることができる。また、巻別に合致の割合を見る

と、語の文字数が多い巻第九、十では合致率が低下する。これは、名語記がそれらの巻で、語全体に対する漢字表記を示すことなく、語を分割して、それぞれに漢字を当てる説明方法をとることが増えるためだと考えられる。

名語記の漢字表記に対する意識として、掲出語の本義につながりがない漢字表記を「義道」と述べ、掲出語の本義につながりのある漢字表記を示そうとする姿勢がある。このような姿勢は、「義道」という語によって従来の漢字表記を退ける条に限られたものではないだろう。前述の巻第九、十のような名語記の漢字表記と字類抄とが合致しない例にも、そのような意識が窺われる。そのような、辞書の漢字表記を示しつつも、言葉の本義に沿った漢字表記を示す点に、名語記著者の合理性や、当時の漢字表記に対する意識の一端を窺うことができるだろう。

第五章「『名語記』と歌学書 ——『色葉和難集』との関係を中心に——」は、名語記に散見する和歌の表現について考察したものである。名語記には和歌に見られる表現を用いて問いを立てる例や、答えの中で歌学書の知識を用いて解説した部分がある。これらは約 150 例あり、名語記の性質について考える上で、少なくはない数である。この中には、名語記が和歌とその「尺」（＝釈）を挙げたものが、歌学書に合致する例（「ヤヲカユク」）や、名語記の挙げた語に対して、複数の「哥仙」の「尺」が存在することを述べた例（「オキナサヒ」）もある。そのような記述からは、名語記が歌学書を参照したことが窺われ、しかもその歌学書は、和歌を挙げて、それに対する複数の注釈を並記するような歌学書であると推測される。

名語記が和歌の表現を用いる条について、名語記の解説と諸歌学書の記述とを対照したとき、色葉和難集（鎌倉時代中期成立か）の、他の歌学書にはない記述が名語記と合致する例が見られる（「サクラカリ」等）。色葉和難集は当時の歌学書としては珍しいイロハ分類体の歌学書であり、項目を先に挙げ、和歌を記し、複数の歌学書の説を並記して示す形式の書である。

色葉和難集と名語記とで共通する項目について、どの程度合致するかを見たとき、共通項目 165 例のうち 61 例が合致する。また、合致しない例でも、他の歌学書と名語記の記述とが関係する例も見られる。名語記が色葉和難集に全面的に依拠したと言うことはできないが、名語記の記述が歌学書に関係することは確かだろう。また、名語記の用いる和歌の表現から考えれば、名語記と関係する歌学書は、単一の和歌集に対して注釈したようなものではなく、複数の歌学書の説を掲載するような書であることが窺われる。

名語記が歌学書の記述を利用する際には、文末に「～歟」や「～トキコユ」のような表現が多く、いわば歌学からは一歩引いた立場から、仮名反によって解説しようとしている。そのような引用態度の問題は、名語記の著者経尊がどのような環境にあったのかを知る上で重要となるものであろう。

また、名語記が和歌の表現を用いて問いを立てるためには、あらかじめ和歌の表現が想

定されていなければならない。このことを第三・第四章と合わせて考えると、名語記は対象とする語を挙げた後に色葉字類抄を参照しているのではなく、あらかじめ対象の語とその漢字表記を把握して問いを立てているのだと考えられる。つまり、名語記は色葉字類抄を参照して、解説すべき語を抜き出した可能性が高いだろう。

(論文審査の結果の要旨)

名語記は鎌倉時代に編まれた現存最古の日本語語源辞書である。本論文は、名語記と先行書との関わりを調査し、その編纂態度について考察している。

第一章は先行研究を概観した上で、その問題点を指摘する。第二章は名語記の成立から現代に至るまでの伝来についてまとめている。第三章・第四章は、名語記の漢字表記を手がかりに、和漢字書である色葉字類抄との関係を明らかにし、その意味するところを考察する。第五章では名語記の中の和歌に関わる記述について考察している。

本論文は名語記を取り扱ったはじめての博士論文であろう。第一章は先行研究の要領の良い整理となっており、これまでの研究の問題点を指摘した上で、今後の研究の方向性を示している。

つづく第二章は、名語記という書物の伝来をたどる。名語記は編纂後、北条実時に献呈されている。献呈された著者（経尊）自筆本のみが知られ、写本は伝わらない。その自筆本は金澤文庫から久遠寺へと移され、その後、複数の所蔵者を経て、現在は所在不明という、数奇な運命をたどった書物である。また、名語記は影印が出版されず、公刊された翻刻も一部分（巻第七）を欠いている。資料利用のあり方をめぐって、学者間で論争も起きた資料である。第二章では、なぜそのような状態になったのかを丁寧に追跡し、記述している。研究の過程で、宮津市前尾記念文庫に名語記全体の紙焼き写真本が所蔵されていることを見出し、その存在を学界に紹介したことも高く評価できる。

古辞書研究においては、辞書記述の出典を確かめることが重要である。というのも、辞書は先行書（多くの場合は先行辞書）をもとにして作られることが多いからである。しかしながら、名語記に関しては、辞書記述の典拠について研究されることがこれまでほとんどなかった。名語記は日本初のまとまった語源辞書として注目されながらも、その記述や語源説については荒唐無稽と考えられることが多かった。また、名語記には書物からの直接的な引用が少なく、記述の中で書名をあげることも少ない。そのため、名語記の記述が先行文献を踏まえる可能性が看過されてきたのである。

そのような中で、本論文の第三章・第四章が、名語記の漢字注記の多くが先行する色葉字類抄と一致することを見出したことはきわめて重要であり、今後の名語記研究の基礎とすることができる。とりわけ、第三章で、色葉字類抄に加え、新撰字鏡、和名類聚抄、類聚名義抄などの先行辞書の記述とも比較した上で、色葉字類抄こそが名語記の典拠であると明らかにしていく考証は手堅いものであり、評価できる。

名語記は、項目（見出し語）を二字詞・三字詞のように文字数によって分類した上で、その内部をイロハ順に配列している。イロハ順は多くの場合、項目の二文字目

下でも守られている。同じくイロハ順掲出である色葉字類抄を材料として利用していることは、名語記編纂の具体的なあり方について示唆するところが大きい。

第五章では、これまで結びつけられることのなかった名語記と歌語や歌学との関わりに着目している。ここでも、具体的な編纂材料として色葉和難集を指摘することで、辞書編纂の問題へとつなげている。また、名語記の成立年が明らかであることから、成立年未詳の色葉和難集の成立時期推定にも寄与している。

この色葉和難集が、当時としては珍しいイロハ順に項目を立てる歌学書であるという事実は重要である。編者経尊は、名語記と同様にイロハ順をとる色葉字類抄や色葉和難集など、辞書編纂の材料としてもっとも活用・吸収しやすい先行文献を使って、できるだけ網羅的に項目を立てようとしたことを見てとることができるからである。

以上のように、本論文は、従来顧みられることのなかった、名語記の出典を明らかにすることによって、名語記の編纂材料とその編集態度について多くのことを明らかにした。

一方、いくつかの課題も残されている。そもそも名語記が問答形式をとるのはなぜか、なぜイロハ順を徹底しているのかなど、根本的な問題が残されたままである。本論文の中心となる出典の指摘に関しても、典拠を色葉字類抄や色葉和難集に限定できるのかどうかは疑問である。編者自身の知識にもとづく記述や、複数の書物を参照した可能性も考慮されるべきであろう。また、漢字注記の出典が色葉字類抄であるとして、そのことから何を引き出すべきかについては十分に考究されていない。加えて、本論文が、他資料の研究にも応用可能な一般的方法論を提示しえていない点は残念である。ただし、その限界にも論者は気付いており、今後の研鑽によって克服されることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成29年2月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。